



衣川 実介

『最初に発見した銅鉱脈』

誰がいつ、どのようにして鉱脈を発見したか？この事について、どの鉱山も曖昧だと『夢通信』の11月号に書きましたが、一つの記事を見つけました。慶雲5年、秩父で見つかった銅鉱脈発見の経緯です。50年ほど前に発行された本「金属と人間の歴史」桶谷繁雄の中に、久下司氏にしたがってとして、以下のように書かれていました。

わが国において、銅の大きな鉱脈が発見されたのは西暦 708年であるが、この銅鉱脈は、武蔵国（むさしのくに）秩父郡において発見された。現在の埼玉県にある正丸峠の北である。このあたりは、古くから高麗（こうらい）族の移住してくるものが多かった。ここに来たのは、日下部宿弥（くさかのすくね）、津島朝臣堅石（つしまのあそんかたいわ）、および韓国から来た鉱山技師の金上无（きんじょうむ）の3人であった。もちろん、何人かの従者をつれていたのであろう。

ある日、この一行が探鉱のため河のほとりを馬に乗って進んでいる時、山から大小の石が落ちてきた。それをなにげなく見ると、長い間にわたって苦心して探し求めてきた自然銅の大きな塊であった。金上无は、このような自然銅の大きな塊がある以上鉱脈があるに相違ないと思い、その山を探して、大鉱脈を発見したのであった。

この発見はただちに大和（やまと）の藤原宮の元明天皇に報ぜられた。朝廷においては、諸官を集め、鉱山技師も出席して見本の鉱石を検討した結果、このような良質の鉱石を出す大鉱脈が発見されたことは神の恵みであるとされ、至急にこれを開発することが決定された。この命令を持った使がはるばる秩父まで来て、ここで、正式に採鉱冶金（やきん）の仕事が始まったのである。

やがて、銅鉱石（純度の高い酸化銅）は炉に入れられて還元溶解され、たとえば真二つに割った太い竹の幹の中に流しこまれ、固められた棹銅（さおどう）とし、馬の背に積んで大和の朝廷に送られた。いわば、待望の銅がここに手に入ったのである。朝廷はこれをおおいに喜んで、慶雲5年という年号を改めて和銅元年としたのだから、わが国における銅鉱の発見と銅の入手は、国をあげての喜びであったと想像出来る。



自然銅と十円玉



和銅開珎



棹銅を作る（江戸末期）

私は和銅元年に初めて作られた銭貨、和銅開珎はこの秩父の銅で作られたものと思っていましたが、最近の研究の結果、山口県にある長登（ながのぼり）銅山や近くの蔵目喜（ぞうめき）銅山から取り出された銅ではないかと考えられるようになっていきます。

桶谷 繁雄（おけたに しげお、1910年～1983年）は、金属学者、評論家。

久下司 - 1902-1994 歴史学者、文化史家。

参考図書

金属と人間の歴史 桶谷 繁雄 講談社 1965年 (P44～47)

金属が語る日本史 斎藤 努 吉川弘文堂 2012年

「鉄のふしぎ博物館」

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感

鉄を見る目がかわりますよ。

ぜひお越しください。



藍銅鉱

一年間ご愛読ありがとうございます！！来年も挑戦し続けます。ご支援よろしく申し上げます